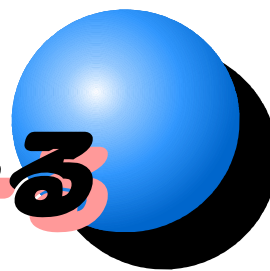




ゆい



・まーる



★VOL 8 令和3年1月7日発行



絵本の楽しさをあそそ分け

■「どこちゃん」

鈴木のりたけ／作

あそび心いっぱい
の作品。左
のページの〈どこち
ゃん〉が、右のペー
ジでは少し違ってい



ます。その違いを楽しむ絵本ですが、ペー
ジをめくるたびにちょっとずつ変わり方に
アクセントがついたり、難しくなったりし
て最後まで楽しめます。●裏表紙の扉にお
まけが付いています。●2歳くらいから。

■「ちょっぴりこわいぞ

どっきりかぞえうた」

高木あきこ／作 さいとうしのぶ／絵

覚え立ての言葉
をしゃべりた
くてしゃべりたくて
たまらない子どもに
うってつけの作品。

●数字の1から10

まで、ページごとに3行の語呂合わせ文が
リズム良く続きます。さいとうしのぶさん
の手の込んだ絵もおもしろく、これは文と
絵をいっしょに楽しむ絵本なんだと気づか
れます。●同じコンビの「1ちゃんいち
にち へんてこかぞえうた」もあります。

●2歳くらいから



■「おふくさん」

服部美法／作

気持ちの良い笑
いにあふれ、

新春にぴったりの作
品。●10人の〈お



ふくさん〉たちは、〈山奥でふくふく、に
こにこ、仲よく暮らしています〉。●どの
ページも、おふくさんたちはみんな楽しそ
う。そこへオニが乱入し、おふくさんたち
をこわがらせようとしますが…最初から最
後まで幸せな気持ちに包まれ、おふくさん
たちのニコニコ顔に引き込まれます。●続
編の「おふくさんのおふくわけ」もパター
ンと楽しさは同じです。●おまけのペー
ジも充実し、作者の分身かと思われるおふく
さんもいます。●3歳くらいから。

■「でっこりぼっこり」

高畠邦生／作

扉のページに
は巨大な足
型の台地がどか
んと描かれ、「で
っこりぼっこり」



という変なタイトル！●巨大人がマラソン
をしたときの足が地面にめりこみ、それが
地球の裏側では出っ張ってしまった跡とい
う説明で、絵本の世界が始まります。へこ

んだ足跡はプールになったりトイレになったり、でっぴりは世界中のあちこちに現れます。ふしぎな世界です。●さて、巨大人が地球を回って戻ってきました。どうなるのでしょうか？…これがお楽しみ。そして最後に巨大人がつまづき…強烈な終わりが待っています。●へんてこりんな絵の世界をそのまま受け入れる子どもに伝わる作品です。●3歳くらいから。

■「ルラルさんのつりざお」

いとうひろし／作

ルラルさんシリーズの9作目。

●ルラルさんは、釣り好きのおじいさんから釣り竿をもらいます。でもおじいさんは病気で亡くなり、ルラルさんは釣り竿を使わずじまい、たまに庭で竿を振るだけです。●そこへ、ルラルさんとルラルさんの庭が大好きなレギュラーの動物たちがルラルさんを釣りに誘います。子どもたちは、ルラルさんの気持ちに関係なく、釣りへ誘う動物たちの明るさに〈何か〉を感じるかも…。●思い出を大切にすることと、そこから前に進むためにはそっと背中を押してくれる誰かが必要なのかもしれません。●3歳くらいから。●常呂図書館にはシリーズ全作が揃っています。「ルラルさんのにわ」「ルラルさんのバイオリン」「ルラルさんのごちそう」「ルラルさんのじてんしゃ」「ルラルさんのほんだな」「ルラルさんのたんじょうび」「ルラルさんのぼうえんきょう」「ルラルさんのだいくしごと」

■「ホッキョクグマ なんきよくにいく」

まつみやけいじ／作

北極から南極へ、シロクマと一緒に地球を縦断する旅ができます。●シロクマの子どもが、おじいちゃんの知りあいのペンギンが住んでいる南極まで3ヶ月以上かけて旅をする物語。途中立ち寄るいろ

いろな国で出会う人たちに助けられながらの旅は、知らないところを旅するシロクマのワクワクした気持ちが子どもたちに伝わることでしょう。●途中、日本の〈しろくま〉という

食べ物の話題が出てきます。この〈しろくま〉と旅で出会った人たちがシロクマの第2の旅につながります。●とてもおおらかな気持ちで味わえる絵本で4歳くらいから。子どもから世界の国々の質問が出てくるかも…なので、読み聞かせに最適。



■「ひろいひろいひろいせかいに」

ルイス・スロボドキン／作

初翻訳で65年前の作品。●「そらには

ほしが いーっぱい」で始まり、身近なことに想像力を働かせてみると「いーっぱい」あ

るものをたくさん紹介しています。訳者で絵本作家の木坂涼さんが表紙に「せかいに いーっぱい あるもの なーんだ？ せかいに いーっぱい ないもの なーんだ？ ほんの なかに でてくるよ！」と書いてます。●子どもたちは最後にかけてえのない自分の存在に出会えます。●3歳くらいから。



■「かばさん」 やべみつのり／作

お父さんが読んであげると子どもに喜ばれます。

●20年前の作品ですが、お父さんと子

どもが絵本を通して〈ごっこ遊び〉ができます。●動物園でお父さんのようなカバと赤ちゃんカバを見てきた親子が家の中で〈カバなりきりごっこ〉を始めます。楽しさにあふれた絵は、子どもの遊びたいという気持ちを高めます。●1歳くらいから。





本との出会いを

ボーイズ＆ガールズに

■「つっきーとカーコのたからもの」

おくはらゆめ／作

表紙の絵がステキです。ネコのつっきーとカラスのカーコは大の仲よし。お互いの足の裏をくっつけてごあいさつの絵。何ともいえず、おもしろそう、読んでみたいと思わせる絵です。●物語は60ページあまりで、カーコが持ってきた宝物の〈びーびーだん〉がなくなってしまうことをきっかけにして、宝物探しが始まります。〈宝物〉って何でしょう？●短いエピソードごとにタイトルが付き、いろいろな宝物が現れます。文を分かりやすくするさし絵が楽しく、子どもたちは読んでいるうちに、大切に宝物〉に気づくことでしょう。●小学校低学年に。



■「青空としゃかんへ ようこそ」

小手毬るい／作 近藤未奈／絵

図書館を通して、〈読んだ人を幸せな気持ちにすることが出来るもうひとつの物語〉に出会う物語。●主人公は、洪水で両親を失った兄弟3人の長女で、小学校4年生のなすな。3人は他の子どもたちと一緒に、母親代わりの優しいルナママのもと、施設で暮らしています。●クリスマスの夜、3人はサンタクロースからプレゼントをもらい、なすなは「フランダースの犬」の本。しかし、なすなは物語の悲



しい終わり方に反発し、サンタを嫌いになってしまいます。●お話は、ここからファンタジーの世界へ…なすなは、町の図書館で「フランダースの犬」のパトラッシュのしっぽを見つけ、〈星空としゃかん〉に誘われ、もう一つの物語を見つけます。●なすなは、〈星空としゃかん〉司書のサンタを通して、いっけん悲しい物語にも続きがあり、幸せが待っていることに気づきます。なすなが〈今〉を考える心の成長物語です。●小学校高学年に。

■「ちいさなバイキング ビッケ」

ルーネル・ヨンソン／作

おもしろくて楽しい物語が新しい訳でリニューアル！

●今から千年ほど前のノルウェーにバイキングと呼ばれる海賊がいました。バイキングは、船をあやつり船を襲って宝物などを奪い、とても恐れられていましたが、この物語のバイキングは、おっちょこちょいで、ちっとも怖くありません。●ビッケはバイキングのいさましい族長の息子ですが、心やさしく知恵のある子どもです。●ビッケはバイキングの船でおとなたちと一緒に航海し、他のバイキングにつかまったり、城を襲いながらもつかまったり…いくつもの困難に出会いますが、そのたびにビッケがおどろくようなアイデアで切り抜けます。●物語のおもしろさは、ビッケのひらめきとお父さん・お母さんとビッケとの笑える会話です。●230ページありますが、7つのつながっている短いお話の訳が良いので、すんなりと読めます。●小学校中高学年に。



■「あしたのことば」

森絵都／作

帯に〈言葉をテーマに綴る8つの物語〉とあり、まさしく作者が選び取り、言葉を大事にしたパターンの違う短編が詰まっています。●1編ごとに違う画家がタイトルの絵を描き、物語の雰囲気や色合いが違うことを印象づけていますが、何より書きわける作者のすごさを感じます。●これなら読める、自分の気持ちにじっくりくる物語にきっと出会えます。●言葉を拾い集めること、伝えること、感じること、分かりあうこと…〈言葉〉が持つ深さを味わえます。●小学校高学年から中学生に。



登場します。音楽が身近にあってこそ生きられる、バンドは生き物…そのシンボルとして晴己と右哉が据えられています。●〈60の子〉のステージを果たした晴己が語る〈オレたちは本当に、これからどんなふうにも生きられるし、どこにでも行けるんだ〉という言葉はとても印象的。●読める子どもは少ないと思いますが、2人の描き方には、今の時代のリアルさがあります。●表紙を見て読んでみたいなと思える中高生に。夢中になれる物語です。

■「エリーゼさんをさがして」

梨屋アリエ／作

両親に自分の気持ちを言おうとすると萎縮してしまう中2の亜美が主人公。●お母さんを頭ごなしに押さえつけているお父さん、うっ屈した気持ちを亜美に向けてくるお母さん…この作品は、家族の中での生きづらさ感じている亜美の物語であるとともに、才能はなくてもピアノが大好きな亜美にとっての〈音楽〉を探し求める物語にもなっています。●作者は、亜美の現状を変えるために2つの出会いを用意しました。1人は変わった絵を描く水野君、もう1人は亜美がデイサービスでピアノ伴奏というボランティアを始めることにつながるエリーゼさんと呼ぶおばあさん。●物語を読み進めると、亜美が迷いながらも水野君の言葉や考え方に刺激を受け、少しずつたくましくなっていくのが分かります。また、エリーゼさんの言葉「巧みな手になれないのなら、優しい手におなりなさい。あなたの手は、あなたが好きなように使っていていいのよ。ピアノ、好きなんでしょう？好きなピアノを弾きたいように弾くのでいいのよ」が最後にも使われ、物語の鍵になっています。●自分を変えてみたいと思っている中学生に。



■「拝啓パンクス

ノット デッドさま」

石川宏千花／作

帯には〈すべての若き読者におくる青春音楽小説〉とあります。●主人公は母親のネグレクトによって、兄弟2人で暮らしている高1の晴己（はるき）と中2の右哉（みぎや）。●2人にとって、1970年代のパンクロックは、生きていくためのエネルギーそのもの。晴己がベース、右哉のボーカルというパンクロック・バンド〈60の子〉を結成し、好きなだけ演奏するのが夢です。●作中説明の〈パンクロックはおとなや社会への反逆のムーブメントとして生まれた音楽〉ですが、現代では忘れ去られた音楽。でも2人にとって、パンクの代表的なバンド／クラッシュやラモーンズの曲は、2人だけの生活で〈これさえあればだいじょうぶ〉という希望です。●この物語には、音楽が必要な子どもたちやおとながたくさん

